ワンパンマンにトラウマ格ゲーボスの力はどこまで通用するのだろうか？

三角定規の角

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

心筋梗塞で死んだ、サラリーマン君（３０代ＤＴ）

何か神から色々言われたけどめんどくさいし、適当にした結果…ヤバイ世界に来てしまった！

周りには超能力者や一撃男、拳法ジジイにヒーロー達。こんな世界でやっていけるのか？

「特典？あぁ、ガチャで選んだ」

目次

使用技、及び能力一覧 ―――――― 1
一撃目　若い時から働きすぎると心筋梗塞になっちまう ―――――― 10
二撃目　欲しいものを狙ってガチャを引くとだいたい欲しくないものが出る ―――――― 16
三撃目　本当に腹が減ると飯を食う気も起こらない ―――――― 22
四撃目　超能力者って何故あんなにも胡散臭いのか ―――――― 26
五撃目　大体の妹キャラは癒やしキャラが、たまにツンデレタイプもいる ―――――― 30
六撃目　女の子の内心を瞬時に見極められる男は、多分ホスト位しかいない ―――――― 34
七撃目　焦ると目の前の事すらいい加減になる ―――――― 37
八撃目　声をかけられると目を見れない ―――――― 41
九撃目　誘拐していいのは誘拐される覚悟のあるやつだけだ ―――――― 45
十撃目　外堀が硬い？なら中から壊しちまえ（暴論） ―――――― 48
十一撃目　格ゲーの差し合いでも気を抜

けばやられてしまう ―――――― 52
十二撃目　アオアシラは弱っちいけどラングロトラは面倒くさい（麻痺的な意味で） ―――――― 55
十三撃目　主人公補正って偉大 ―― 59
十四撃目　それは竜巻というにはあまりにも大きすぎた ―――――― 62
十五撃目　Q．二次元と三次元の違いとは？　A．顔、行動 ―――――― 66
十六撃目　後日談　第1部　完 ―― 70
番外編　外撃　前 ―――――― 74
番外編　外撃　後 ―――――― 78

使用技、及び能力一覧

［アルバート・ウェスカーの能力］
ご存知バイオシリーズのラスボス。
本来の力はウイルスによる肉体強化だがオリ主の能力は普通の肉体強化（要するにめっちゃ鍛えたような物）となっている為、能力として成長する。
体を鍛える事や戦闘の経験等によって身体能力が上昇する。
主人公はウェスカーの体術と身体能力を取得。
能力の成長の可能性あり。

［ゲーニッツの能力］
人気格闘ゲームであるＫＯＦ…キングオブファイターシリーズのキャラ、ゲーニッツの能力。
風を操る能力と体術を取得。
能力の成長の可能性あり。

［レベルアップ］

定時連絡の際に、これまでの経験から身体能力、及び特殊能力（特典）の成長または取得が可能となるスキル。

強敵と戦うほど経験値は貯まる。

その経験値を使って基礎能力を上げるも、新規の特典を貰うも良し、次回の定時報告まで貯めるも良し…それは主人公次第である。

その他、後に取得したスキルや能力はその時の後書きにて説明。

［使用技］

【冥府の門（めいふのもん）】

相手の体を素早く前方に叩き付ける投げ技。

【葬活殺（そうかつさつ）】

相手の持ち上げ、連続で首を締め上げた後掴んだ方向とは反対側に叩き付ける投げ技。

締め上げた後首をへし折る事も可能。

【裏薙（うらなぎ）】

素早い動作でお腹辺りを裏拳で殴る技。

ウェスカーの力により当たると致命傷となる。

【闇慟哭（やみどうこく）】

相手を掴み、竜巻で相手の体を切り刻んでから投げ飛ばす技。

この作品では風の出力の調整が可能で、最大だと人を一瞬で細切れにする威力。

しかし余りに強い風である為、強くしすぎると自らの体にもダメージが入る。

掴める範囲は人1．5人分程の間なら、風で吸い込み掴む事が可能。

【夜の風】

任意の場所から凄まじい竜巻を起こす技。

出現場所は自由だが、オリ主は正確に足下に出現させる。

また、進行方向に出現させ進行妨害や奇襲にも使用可能である。

夜の風↓闇慟哭のコンボは非常に強力で、並の怪人ならば一瞬でミンチになってしま

うレベル。

【雲雹・常伏（わんひょう・とこぶせ）】

自身の前方に強力な鎌鼬を発生させる技。

使用者の判断により相手を追尾させたりする事もできる。

【雲雹・摩滅（わんひょう・まめつ）】

前述の技、【雲雹・常伏（わんひょう・とこぶせ）】で出した鎌鼬を高速で飛ばす技。

常伏と同じく相手を追尾させる事もできるが、遠くへ行けば行くほど威力は下がる。

【豹牙（ひょうが）】

姿勢を低くして、前方へ高速移動する技。

後に解説する【迅速移動（じんそくいどう）】よりも移動距離が短い分早い。

風で移動する姿を消す事ができる。

【真葵花・青藍（しんあおいはな・せいらん）】

相手を連続で３回引き裂く技。

使うとかなりグロテスクな絵面となる。

【風塵(ふうじん)・息吹(いぶき)】
【真葵花(せんあおいはな)・青藍(せいらん)】からの派生技で3回引き裂いた後に発動。相手が倒れた所に竜巻を発生させて追撃する。

【真琴月(しんことづき)・双牙(そうが)】
滑るように突進して片手を振り下ろし、更に反対側の手で相手を掴み上げ竜巻を浴びせて吹き飛ばす技。
並の怪人では吹き飛ばす前に死んでしまう為、吹き飛ばすまで至らない。

【真八稚女(しんやおとめ)・蛟(みずち)】
【豹牙(ひょうが)】と同じ動きで相手に突進、近づくと連続攻撃を叩き込み最後は【葬活殺(そうかっさつ)】で相手を叩き付ける。
簡単に説明するとコンボ技。
この技を相手にガードさせて、【闇慟哭(やみどうこく)】に繋げるといった反則級の使い方もある。
また、風で姿を消しながら突進し、連続攻撃数を増やしたバージョンも存在する。

そのバージョンはこの技と区別する為に【真八稚女(しんやおとめ)・十爪刻(じっそうこく)】と呼ばれる。

【息吹(いぶき)・永代(ながよ)】

自身の周りに竜巻を発生させ敵を引き寄せる技。
近くで当たると大ダメージは必須で、更に高く打ち上げられるというオマケ付き。
発生させた竜巻は前方に飛ばす事も可能。

【二昇脚(にしょうきゃく)】

片足を軸にもう片方の足を相手の顎目掛けて蹴り上げ、その後軸足を交代し追撃する技。所謂二段蹴り。

【先崩掌打(せんほうしょうだ)】

相手の胸部めがけて掌打を放つ。
その時の動きは目視不可能とすら言われている程の速さである。
威力はほぼ即死と言ってもいい程。

【平進掌打(へいしんしょうだ)】

相手の腕を攻撃し、怯んだ隙にはたく様に掌打する技。
そこまでの威力は無い。

【背流脚（はいりゅうきゃく）】
相手の後ろに回り込み、腰部分に前蹴りをするだけ。
しかし、身体能力が上がっている為背骨を折ったりと中々に凶悪な技。

【昇甲掌打（しょうこうしょうだ）】
対象の敵を、下から突き上げるような掌打を繰り出す。
アッパー掌打。顎を粉砕する威力。

【猛衝脚（もうしょうきゃく）】
相手の正面か背後に周り蹴りを見舞う技。
一撃のみと連続蹴りの二種類がある。

【葬送脚（そうそうきゃく）】
ダウンしている敵に踵落としを放つ技。

頭に当たると十中八九頭が粉砕され即死。

【覇砕双剛掌（はさいそうごうしょう）】

当たると大抵の敵は即死する大技。

連続で体術を決めてゆき、最後に真正面から両手で強烈な掌打を繰り出す。

単に両手で強烈な掌打を繰り出すだけでも可。

【獄突（ごくとつ）】

当たると大抵の敵は即死する大技。

連続で体術をきめてゆき、最後に背後から手刀で胸を刺し貫く。

単に手刀で胸を刺し貫くだけでも可。

【断影肘（だんえいちゅう）】

残像が見える程の速さで顔面に肘打ちを当てる技。

主に不意打ちや技と技との間の繋ぎとして利用される。

【迅速移動（じんそくいどう）】

凄まじいスピードでの移動、ただそれだけ。
サイタマの【マジ反復横飛び】と同じ様な物。
しかしコチラは直線移動の為、小回りが効かない弱点がある。

【轟砲膝(ごうほうしつ)】
【迅速移動(じんそくいどう)】中限定の超高威力な膝蹴り。
正面の敵にはかなり有効だが、横に移動されると躱されやすいというデメリットがある。少々頭を使わなくてはいけない技。

一撃目　若い時から働きすぎると心筋梗塞になっちまう

俺は――死んだ。
間違いない、死んだはずだ。
何故わかるかって？そんなもん俺が凄い年寄りだったからだよ。…すまん嘘。
実際は多分心筋梗塞だったと思う、だって自分の姿見てたし。
目の前に神なんて居ないけどな！
俺の死因は…え？さっき聞いた？……まぁ聞いておくれよ。俺も暇なんだぜ？
あれは俺が風呂から上がった時じゃった……はず、うん

自宅の風呂場で急に心臓付近が痛くなったと思ったら…
ふと気が付くと、自分の姿を見下ろしていた。何を言ってるが分からねぇと思うが、俺も何が起こったのか分からなかった…
心臓付近を強く握り、苦悶の表情を浮かべて動かない俺の身体を上から見下ろす。変な気分だよ、自分の死体を見下ろすなんて初めて（？）の光景だしな。
生まれてから３４年、悔いはない…と言えば嘘になるな。

結婚もしたかったし、残してきた弟夫婦とその娘を可愛がってやりたかった…が、仕方あるまい。
それと俺のムスコ…いや兵士を一度でいいから（ｒｙ
…うだうだ言わずにさっさと昇天（帰る）としようか。
ちょうど良く体の色も抜けてきたわ…まるで消えるみたいだな。
だがまぁ…いい人生だったと思うぞ、我ながら……
俺の霊圧が…消えｔ

…ん？消えとらんぞ？どうなってる？
あるぇ～？おかしいな…確かに意識も無くなってたし、体も透けてきてたし、成仏したと思ったんだがなぁ。
あれ？もしかして俺、幽霊？……うっそお？
そんな事を彼が考えていたら、目の前から美女が歩いて来た。
それは、現在進行形でパニクっている彼を更に混乱させるに充分なモノだった。
なんか来た…おぉ、しかも美人！

いい歳こいて何してるんだ、と言われても仕方ない位にオタオタしとるな、俺。
やばい、語彙が消えていく…まずい（思考停止）
俺生前もあまり女の子と話した事無いんよ…
……いや、まてよ？

俺、幽霊　↓　見えない　↓　やり過ごせる

これだっ！
「あの…見えてますし、読めてますし、恥ずかしいんですけど???。私女の子って歳じゃないです。こう見えても貴方より歳上です！」
――――主人公?、思考停止中――――

…
……
……え？

――――主人公、思考再開…理解中――――

はぁぁぁぁ!?

この見た目で?たまげたなぁ…最近の女の子は…

「いや、貴方の今の見た目でそんな事言われましても…はぁ、もういいです。これで自分で確認して下さい」

今の見た目…?何があるんさ。

あ、鏡くれるの?ありがと…う…!?

あれ～俺の２０歳の頃じゃね?

髭も無いしメガネもしてないし…髪型も元に戻ってる!

フォォォォ!!体から力が漲る!（気がする）

ナニとは言わねぇけど最近自家発電してなかったしな!

「…手短に説明しますね?貴方には、特別な使命があります。それは、様々な世界で一生を過ごしてもらいます、貴方が向かう世界は全て命の危機がありますので、こちらは転生特典をプレゼントさせて頂きます。」

何かとても白い目で見られてるんですけど…その目も美人がやるとイイね!我々の業界ではご褒美です!

いかんいかん…はしゃぎ過ぎた。それで、確か特典がどうとか…

転生ねぇ…マジ?う～ん何にしようかなぁ…どうでもいいしな…

第一、あんまりチートすぎると色々と巻き込まれるからな…適当に決めよう！
地味な強さを目指してとか、俺じゃ決めきれねぇわ。ガラポン抽選とかで決めようかな。
「…」
あれ？何その目、確かにご褒美とはいったけど…その目は養豚場の豚とか家畜に向ける目じゃない？
そんな目で見られると流石に傷つくわ…よよよ…。
「…」
…あら～？無視ですかぁ？反応してくれると嬉しいんだけど
じゃないと私死んじゃうぞ～ウサギはストレスに弱いんだぜ？
「…ウサギ関係ないでしょう」
は？ウサギが関係ない…だと!?
ふざけたこと言ってくれるじゃん…表でろよ。
「…まさか貴方に何か関係が？」
んにゃ、無い…待て、暴力は良くないと思うの。
だがらその握り拳を収めてくれよ、話せばわかる！
「問答無用！」

こうして、この男の奇妙な旅が始まるのである。

しかしこのガラポンという一見バカにしか見えない行為が後に、奇跡を起こすとはまだ誰も気付いてはいなかった…

二撃目　欲しいものを狙ってガチャを引くとだいたい欲しくないものが出る

どうも皆さん、俺改め私です。今何をしてるか分かりますか？
…そうでしょうそうでしょう、わかりませんよね。
答えは簡単、今は彼女の指示を待っています。
今、神が転移させようと準備しているでしょうね。
何故って？…それは私がが説明しましょう。

――――回想、特典内容――――

「それでは、このガチャガチャの中に特典が書かれた紙の入ったカプセルが入っています。どうぞ、引いてみてください」
（まぁ…どうせあまり良いものは当たらないでしょうけどね、ガチャガチャですし）
「……」ガチャガチャ

（俺ガラポンって言わなかった？）

一つ目の特典、「ゲーニッツの容姿と能力」
「…ゲーニッツ？…あれ、どこかで聞いた気が…」
「…これは」
（彼はもしかすると…）

二つ目の特典、「アルバート・ウェスカーの能力」
「…化物になっていく気がするな」
「……」
（素晴らしい！これは私が訓練すれば、凄まじい戦力になってくれますね）

三つ目の特典、「レベルアップ」
「テレテレテッテッテーとか？」
「レベルアップというのは、その人生終了時に、その人生で経験した事に準じてステータスがアップする方式です。貴方の仕事にはピッタリな特典ですよ！」

そうなのか…すげぇの引いたな…。

ん、待てよ？そもそも何故俺なんだろうか。

言うちゃ悪いが、俺はあまり神を信用しとらんかったし…それに特別な才能やらはなかったはず…

だって、〝はい二人組作ってー〟って言われたら必ず最後に残る3人のうちの一人だったし。

友達が居ないんじゃ無くて一人が好きだったの、ホントだぜ？

…そういえばラノベとか読んでたらリア充が「何読んでんの？」って聞いてくるのウザいよね、関係ないけどさ…。

考えた瞬間、くるっとこちらを向きながら目の前の神が答える。

俺は急にはにかみながらこちらを向いた神に内心ドキドキである。

俺N―DT（ニュードウテ）なんだからそこん所考慮してくれよ。

「理由は簡単、貴方が仕事熱心で頼み事に弱い性格だったからです。……それでは」

あれ、心読まれた？てことはさっきのピンク色の話もバレてる？…恥ずかしい。

神が指を鳴らすと、彼の体が煙に包まれる。

そしてその煙の中から出てきたのは…屈強な身体をした男であった。

どこか碇ゲン〇ウに似たその男は…先程までいた彼である。
「これで貴方は特典を受領しました、次は我々の訓練に付いてきてもらいます」
おおおお…コレが、ゲーニッツの体…凄いなこの筋肉。
…あ、下は俺と同じ…てか俺のなのね。
で、訓練か…武道着来てるし大丈夫だろう、問題はどんな訓練k…
「行きますよぉおおお！」
いきなり来たぁ!?嘘、ちょっ待てぇぇ！
…アイナ様、私は死に場所を見つけました…？
あれ、これだと死ぬな…！
私とて、ザビ家の…これもやべぇ。
…見よ！東方は赤く燃えている！
「うぉぉぉ！」

ここから、私の死ぬほどの訓練が始まったのです。

倒れるまで戦い続ける、それはもう戦闘民族並に。
それが終われば今度は能力の訓練。ゲーニッツ（私の身体）の能力である【風を操る能力】を極限まで使えるように、です。
更に、ウェスカーの力である【弾丸を見切るほどの身体能力】及び、【残像が見える程のスピード】、【凄まじい力】を上手く使いこなせる様に訓練が続きました。
最終的にそれらの訓練にも慣れ、能力が上手く使えるようになると今度は座学に入りました。
そのせいで私の話し方もこんな風になりました。
気付けば１０年はたったのでは無いだろうか…と思いますよ。
いや、体は歳を取っていないのですがね…？
「ゲーニッツさん、準備できました。…貴方には前にも言った様に、様々な世界を巡ってきて貰います」
私は軽く頷いて先を促す。それに彼女も気付いたのか、少し微笑みながら言葉を発する。
「貴方の信じるに値するものを、見つけてきてください……それでは。……さん」
…最後に私の過去の名前を言われたような気がしますが…もう聞こえません。

今の私が覚えている前世の事など、精々家族構成位です。
名前等はすべて時間と共に消えてしまいました。
昔は悲しく思ったが、今はそれ程でもない…慣れとは怖いですね。
そう思ったとき、意識が暗転し、次に気付いた時は幼児でした。
……え!?

三撃目　本当に腹が減ると飯を食う気も起こらない

目が覚めたら知らない天井…ではなく。
大きな空が広がっていますね、何故に…？
と、取り敢えず面倒ですが周りの探索からですね。

……お腹が減りました…まさか幼児からスタートとは。
まぁ、当たり前なんでしょうが…面倒ですね。親は、、、おや？
親は居ない…のでしょうか……？流石に親なしは訓練したといえどマズイですよ？

どうするべきかかなり悩みましたが取り敢えず、体は動くのでご飯を探すことにしました。
流石に二度目の人生、開幕餓死はゴメンですからね。
暫く探すと、残飯があったので仕方なく食べる事にしました。
どうやらココは町…の中のごみ捨て場、廃材の集まりの様です。
そしてこんな所にいるという事は、私は捨てられたのでしょう。

いきなり人生ハードモードですね…正直言ってキツイですが頑張りますか。

アレから6年程経過したのでしょうか…私の今の稼業は正義のヒーローです。
どんな事かと言いますと、例えば
スリが財布を盗る→取り返す→持ち主に返却し何円か貰う
こんな事を繰り返して生活を賄っています、たまに現れる〝自称　怪人〟を倒せば市や商店街等からお礼として賞金や商品券をくれるのでそれも生活の足しに…
そして家は自作した小屋（笑）に住み、家計をやりくりしながら生活をしてます。
そろそろ自宅も拡張したいんですがね、中々手が回りませんよ。
特にお金が圧倒的にたりな――
「――ジリリリリ!この目覚ましベル様が貴様らを不眠症にしてくれるわぁ!ジリリリリリィ!!」
…ほら、こういう奴を倒せばお金になるのです。

とっても楽な稼ぎだと思いませんか？さて、そろそろ消しましょうか。

「ジリリ…ん？何だこのガキ、人間なんぞこの俺様の手にかかれば一瞬、でぇッ――!?」

私の体術が完全に決まり、相手が沈黙しましたね。

いい感じです、ちょうどこの光景を見ている人も居ますし…

アレで決めましょうか…ならば掌底で吹き飛ばして、と。

「…お別れです!!」

叫んだと同時に目覚ましベルの周りに突風が吹き荒れる。

しかし、それは突風と言うには些かキツ過ぎる威力の代物であった。

吹き荒れる突風は確実に怪人の体の肉を削ぎ落とし、血を撒き散らしつつもその身体を小間切れにしていく、既に体術の影響で瀕死の怪人にトドメを刺すには充分過ぎる攻撃である。

技の名を【夜の風（よのかぜ）】、彼の基礎中の基礎の技である。

そして、この場に居合わせた姉妹、その姉の方は口角を上げながら興味津々といった様子で見ていた。

一方妹は撒き散る血に少し怯えながら、それでも血と風の織り成す幻想的な風景に目を奪われていた。

こんな感じでしょうか？

少しやり過ぎた感はありますが…まぁいいでしょう。
そして、自身をここに連れてきた神の元へ帰れるようにと。
彼は願いを込めて必ず最後にこう言うのだ…
「貴方に、神のご加護があらん事を…」

四撃目　超能力者って何故あんなにも胡散臭いのか

さて、怪人も倒して商品券も貰いましたし今日は何か美味しいものでも食べましょう！

普段は余り良い物は食べられませんからね、今日ぐらいは良いでしょう。

うーん、ラーメンでも食べましょうか…ちょっと高いパックのヤツ。

アレは、確かかなり美味しかったと前世では記憶しています。

「～♪～☒♪～♫」

「ちょっとそこのアナタ、こっち向きなさい！」

いきなり声をかけられた私が振り返ると…そこには、小柄な女の子が立っていました。

髪色は緑色で天然パーマがかかっています。

はて、私の知り合い…では無いですね。

誰かと間違えた？いや、その確率は低いでしょう。間違いなら私が振り向いた瞬間に何か反応があるはず。

ならば何故？

「あの、私に何か御用ですか?」
取り敢えず、私は失礼の無いようにそう言っておきました。
すると彼女は得意そうな顔をしてこう言ったのです。
「さっきの戦い、見てたわよ。さっきのあの風…超能力?」

コレが噂に語られる二人のヒーローの初めての出会いである。
後の【吹き荒ぶ風】と【戦慄】の二人のS級ヒーローが初めて言葉を交わしたのはこの時である。
最も、この時は超能力の使えるそこそこの小娘とその日の生活にも困る貧乏転生者という身分であったが。

「ええ、まあ…超能力の様なものですね。ところで、何故風を見ただけで超能力だと思ったのですか?」
「それは…その…何でも良いでしょ!それよりも、アナタ名前は?」
「その怒りは理不尽です…それから私の名前は、ゲーニッツ。アルバート・ゲーニッツ

です。貴女のお名前は？」
「…タツマキよ、で。その…ほら、アナタ友達は？」
友達…とは、共に遊んだり、時には喧嘩したりするアレでしょうか？
流石に精神年齢的にも、今の生活的にも友達は居ませんね。
ですが「友達なんて居ません」と言うのは少し恥ずかしいような気もしますが。
…仕方ありません、正直にいいましょう。
「いえ、正直友人作りは苦手な上に現在生活が苦しいもので…」
「…な、ならさ。私と…と、とと、友達にっ、ならない？」
うわぁ、顔が真っ赤ですね…恥ずかしかったんですねきっと。
ここまで女の子に言わせてしまったら断れないでしょう。
顔も目をギュッと瞑ったままですし、余程緊張したんでしょうか？
「…私で良ければ、よろしくお願いします」
返答した瞬間、顔がパァァって効果音がつきそうな程明るくなった。
何ですかこの可愛い生き物。
「…アナタ携帯は？」
携帯…自作の違法スレスレの携帯はありますけど、正規のヤツとメールや電話できるんでしょうか？

そこが問題ですね、まぁ…大丈夫だとは思いますが。
「…これです」
「ありがと……ピッ……はい返す」
アレが世にゆう赤外線通信!!
科学の力って素晴らしいですな。
「…また今度連絡するわ」
そう言い残して彼女は消えてしまいました、やはり彼女…超能力持ちなんですね。
私の力を超能力だと言い始めた時点で…何となくわかりましたけど。

五撃目　大体の妹キャラは癒やしキャラが、たまにツンデレタイプもいる

彼女…タツマキと出会って早一年、私の生活がガラッと変わりました。
たまに彼女が家に来るようになったのと、私の住居が変わりました。
私は汚い家だったので慌てて掃除したんですよ!?しかし…
家を見た途端ワナワナ震えだして…私の自作の家を木っ端微塵にされました、まる。
後で聞いた話によると、見た目や清潔感が気に入らなかったらしく。
「自分と同じ能力者がこんなとこ住んでるなんて我慢できないわ」…と言われました。
そして現在は、召使として彼女の養父の所で働いています。
住み込みの仕事なのでとても楽ですね、久しぶりにベッドで寝ましたよ…
現在の彼女との関係は、仕事中は雇い主で仕事が終われば普通の友人です。
おや、誰か来ますね?誰でしょうか…
「ゲーニッツ、この前の作ってくれない?」
この前の…アップルパイですか。
「分かりました、早速作りましょうか。フブキさんもいかがですか?」

「うん？ゲーニッツ、この前のって？」
あ、彼女の紹介を忘れていました…
彼女はタツマキさんの妹さんで、名前はフブキさんです。
彼女も超能力があるらしいのですが、タツマキさんから聞いただけで実際に見た訳ではありません。
そしてタツマキさんよりも少々おしとやかです。
「私はフブキも食べられるサイズを作ってほしいけど…良いの？」
彼女だけお預けなんて、私にはできません。
私の中の神（子供に激甘）が囁いています！
「アップルパイを作ってあげなさい」と…っ！
「勿論、構いませんよ」
「わ～い！ねぇねぇ何作るの？」
とても喜んでいますね…可愛らしいです。
…ところでタツマキさん？そのシャープペンシルをコチラに飛ばすのやめて下さい。
貴女の力（超能力）で飛ばされれば流石に痛いです。
ほら、フブキさんも「？」て感じじゃないですか…何か更に強くなってません？飛ばす力。

「…さっさと作りなさいよ！」
「…流石にアップルパイはそんなにすぐには作れませんよ」
「アップルパイ!?そんなの作れるの～？凄いね！」
怒ってるタツマキさんと褒めてくれるフブキさん。
もう何が何だかわかりませんね…フフッ…ですが悪くありません。
心地良い時間である事は確かです、癒やし…と言うべきですか？
「それでは作り始めましょう、二人にお手伝いを頼んでも？」
「「もちろん！」」

……このあとメチャクチャアップルパイ食べました。

ある日、雇用主である養父殿に呼び出されました。
何事かと思って話を聞くと…とんでもない事を聞かされました。それは…

「なぁ…ゲーニッツ。彼女達は幾らになると思う?」

まさに、一瞬。

さも当たり前の様に語られた言葉に、私は言葉を失いました。

養ってやっているとは言え、こんな年端もいかない女の子二人を…銭勘定に含むのか…っ!と。

ただでさえ力のせいで異端の目を向けられるというのに、父親さえ彼女らを売り飛ばすのか!

しかし、それを声に出したり表情に出せば更に雲行きが怪しくなります。

なるべく私は表情を殺し、平常通りの声を出す事を心掛けこう言いました。

「あぁ…貴方は金に貪欲なクソ野郎でしたか」……と。

目の前のクズの顔がみるみる歪んでゆく、見ていて滑稽ですね。

愚かな人間に相応しい顔つきです、が…ここで何とかせねば彼女達はきっと売られてしまうでしょう!

それだけは…それだけはさせませんよ!彼女達は私の妹の様なものですから。

六撃目　女の子の内心を瞬時に見極められる男は、多分ホスト位しかいない

私と彼が出会ってから、もう一年近く経つだろうか。
初めて彼を見たときは、彼は怪人を私と同じような力で屠っていたのだ。
今まで、超能力者は数多く居たけれど…私と同じ位の力を持った超能力者は居なかったので、とても新鮮だったって事は今でもハッキリと覚えてる。
それで…その…は、初めてだったから、その…
どんな風に声をかければいいのか分からなくて、でもいきなり「私は超能力者だ」なんて言ってもし彼の力が超能力じゃなかったら…とても恥ずかしい。
だから私は、まずは本人に直接聞いてみることにしたのよ。
「貴方のその力は超能力か？」みたいな事をね。
今思えば、当時歳の私はよくこんな穴だらけの計画を実行したな…とつくづく思う。
結果的に彼がいい人だったから良かったけど、いきなり「友達になれ」はないと自分

でも思うわ…

てかよくゲニはＯＫしてくれたわね!?アイツやっぱり途轍もないバカだわ！

…と、話が逸れたわ。

それから…えっと、そうそう。確か友達ができた事をおじさん(養父)に伝えたら、嬉しそうな顔をしてくれたけど何か違和感を感じたのよ。

まぁ、今なら理由が分かるけどその当時はまだ知らなかったから…

（なんでだろう?）位しか思って無かったわけ。

その後、アル…あ、アルってのは彼…ゲーニッツのあだ名よ、私が考えたの。

アルバート・ゲーニッツのアルバートをもじったの。

で…そうよ、彼の家に遊びに行ったら…あぁ…今でも腹が立つわ！

何故って!?そりゃゲニがゴミ山のヘンテコ小屋に住んでたからよ！

仮にも私と同じような力を持ってる人間、しかも初めての私の友達がボロ小屋暮らしだなんて許せないわ！

だから…ね？小屋を壊して、私のおじさん(養父)に紹介したの

「彼が例の友達、一緒に暮らせない?」って。

……そこ、バカにしないで。

しょうがないじゃない！その時まだあんまり常識無かったんだもん！

で、ゲニが「おじさん(養父)と二人きりで話す」って言って…
しばらくすると、ＯＫが出たって彼が言うから妹と手を叩いて喜んだわ。
…その頃には、いつの間にかか妹とも仲良くなっちゃってたのよ。
そこからは毎日が楽しかったわ…だって彼、何でもできるんだもの。
炊事、洗濯、掃除、能力の訓練から話し相手まで…
今まで、この能力のせいで友達なんて居なかった私はとても新鮮な日々だったわよ、ええ、悔しいけど認めるわ…楽しかったわよ！悪い!?
フブキも能力が目覚め始めて、力の使い方を二人で教えたりとかね？
でも、そんな日々は一瞬で潰れたの……っ！

おじさん(養父)が私達を施設…超能力の研究機関に……売ったのよ。

七撃目　焦ると目の前の事すらいい加減になる

くそっ！間に合わなかった！
既に彼女達は売られてしまった…ああ胸糞悪い！
彼は…殺さねばなりません。あんな男は生きる価値が無いでしょう…？
「さァ…神に祈りなさい…ッ！」
「ま、まて！俺に手を出せば警察g…っっっっっうあああああ！」
顔面に軽く拳を当てる、それだけで鼻が折れたようですね。
ですが、ちっとも慈悲の感情が出ない事に自分でも驚いていますよ…
それ程までに…彼女達の存在が、私の中で大きくなっていたのでしょうね…。
「わ、わらひの鼻がァァァ！き、貴様っ！ぜっはいに許さんぞ」
煩い、五月蠅い…とてもうるさい！
こんなゲスに構ってる暇は無い！しかし、殺らねば気が済まないのですッ！
コイツだけは…ここで始末させてもらいます。たとえそれが…人の道を外れた行為だとしてもッ！
激情に流されながらも、鍛えられた身体はきっちりと技を決めてゆく。

男の体から枯れ葉の様に空を飛ぶ。一般人が見るとまるで空想の世界のようだと思うだろう。

…おや？今度は命乞いですか…見苦しい。

「こ、ここら！ココにあのガヒ共が居る！ほら！ばひょもおひえたからたしゅけへくれぇ！」

「…何を言っているのか分かりませんね、そぉら、さっさと送ってあげますよ」

「このやろう！たしゅけっ…ガッ!?」

【先崩掌打（せんほうしょうだ）】で腹に風穴を開ける、コレだけでも放っておけば死ぬでしょうが…

「ガヒィ!?」

【平進掌打（へいしんしょうだ）】で肩を外し、更にバランスを崩させ転ばせる。

コレでもう既に虫の息ですね。さぁ…仕上げです。

「た、たしけ……」

【葬送脚（そうそうきゃく）】を頭に当てる。

ゴリュっと変な音がして、遂に彼は動かなくなりました。

足を上げると頭の破片と血が大量に付着していましたが…今は緊急です。

助けに行かねば…タツマキとフブキを！

気付けば私は駆け出して居ました、あのクズが言っていた住所へと。

それが嘘の情報だとも思わずに。

居ない、いや居ないどころか建物すら無いです。
これは…あのクソ野郎はあの状況でまだ嘘を…ついていたのですか？
困りました、これ以外に手がかりは無いのですよ？
とにかく、私にできそうな事を…全力でやるしか無いですね！

それから私は探し回りました、怪人を半殺しにして尋問したり、市長に直談判して組織について調べてもらったり…
そして分かった事は…超能力者を集めて研究していると言う事のみでした。
既に連れ去られて3年は経過しています、正直私は焦っている。
そこで私は…策としては下の下と言ってもいい方法を実践しました。
超能力者を集めているなら、私を餌にしてその組織に潜り込む！
相手の戦力がわからない以上、これ程やってはいけない策はないでしょう。
しかし、私を危険に晒すことで彼女達を取り戻せるのならば…

どうせ二度目の人生なんです、命ぐらいは張りますよ。

「さぁ…ここから反撃開始です…！」

八撃目　声をかけられると目を見れない

怪人をできるだけ派手に殺すよう心がけて…

【真八稚女(しんやおとめ)・蛟(みずち)】や、【雲雹(うんひょう)・常伏(とこぶせ)】、ときには【真葵花(しんあおいはな)・青藍(せいらん)】を使って殺す。

そうする事で奴等(研究者共)が現れると信じて、体を酷使していく。

ここ最近は毎日が地獄ですよ…疲労とストレスでどうにかなってしまいそうな程にね。

それでも私は足を止めるわけにはいかない…

足がもげようと、腕が折れようと、お腹に風穴が開こうと関係なく…私の身体が天に召されるその瞬間まで、彼女達の為に全力を尽くす。

「彼女達にはまだ、居場所を貰った借りを返していませんしね」

「意味わかんねえ…急に襲ってきたと思ったら！な、何なんだよ…俺はまだ何もしてないのに…う、うわぁぁゲヒッ！」

その為には怪人の虐殺(尊い犠牲)は致し方ない事なのですよ、私の中ではね。

さて、とりあえず【闇慟哭(やみどうこく)】で切り刻みましたが…

一般人は少し引いてますね、逆効果だったでしょうか？

…いや、私が超能力者だという噂は確実に出てきています。
もうすぐ、もうすぐあなた達の元へ辿り着き、必ず助け出します…！
ですので、もう少しだけ…もう少しだけ耐えてください。

今日も収穫が無く終わったも嘆きながら帰路につくゲーニッツ。
そんな彼に声をかけようと近づいてくる黒塗りの車が一台、彼を追い越すと停車し中から黒スーツの男が降りてくる。
「見つけたぞ、アルバート・ゲーニッツだな？私はある研究機……っ!?」
声をかけた瞬間、彼の雰囲気がガラリとかわり、戦闘慣れした研究所の戦闘員である男ですらたじろぐ程の殺気を放つ。
声をかけた男が見た顔は、表情はにこやか…しかし、纏う雰囲気は化物や鬼神と形容

した方がいいのではと思う程のプレッシャー。
瞬時に力の差を悟った男を誰が責められようか、しかし、それはこの男が優秀な人材である証明とも言える行動である。

「何か…私に御用ですか?」
優しげな声とは裏腹に、目は射殺さんばかりに鋭く睨まれている。
そんな中でも自らの任務を遂行せんと行動した男は、やはり優秀な人間なのだろう。
最も、死の間際までその態度が続くかは別の問題だが。
「……我々と共に来てもらおうか」
男は死を覚悟しながらそう言った。
彼の一挙手一投足見逃さぬようゲーニッツから目を離さずに。
しかしそれらはすべて杞憂に終わる。
何故なら彼が…
「ええ、分かりました。それで…何処に向かうんです?」
その申し出を受けたからだ。

ようやくです、ようやくですよタツマキさん、フブキさん！
もうすぐ貴女達の元へ辿り着けます！
待っていて下さい、すぐに研究機関を機能停止（完全に破壊）させて貴女方を連れ戻しますよ。
大丈夫です…ちゃんとその機関が非合法の裏組織である事は確認済みですから。
何をしようが問題ありません、それこそ…
研究者を皆殺しにして施設を木っ端微塵にしてもね…
勿論、例えばの話ですが。

九撃目　誘拐していいのは誘拐される覚悟のあるやつだけだ

全く…人を車に乗せるや否やいきなり手錠をつけるだなんて…手荒すぎませんかね？

まあ、研究所に着くまでの辛抱ですか…そういえば手錠なんて初めてつけました！

こんな感じなんですね…前世でも今生でもつけた事は一度も無かったですからね。

「着いたぞ、ココが我々の研究機関だ」

おやおや…もう着いたんですか、早いですね。

早いのは嫌いじゃありませんよ？

遅すぎるよりは早すぎる方が良いでしょう？…早すぎるのも考えものですがね。

さて、そろそろ殺りますか。

先程話しかけてきた男が車から降りたら、まず運転手から片付けましょうかね。

「…おい、ついたぞ。ヤツはもう降りたんだから早く降りろ」

「……」

「おい！聞いてる……カッ…」

まずは一人。【獄突（ごくとつ）】で仕留めたので恐らくは即死でしょう。
あの男には…気付かれていませんね、良し。
次はあの男です、不意をついての攻撃になりますが…もはや卑怯とは言いませんよね？
「…おい、遅いぞ…っ!?だ、大丈夫か…ぐおっ!?」
…【夜の風（よのかぜ）】。この技ならば楽に出せるうえに簡単に人間をミンチにして殺す事も出来ますし。
簡単に説明するなら…そうですね…〝楽に死ねる〟ですか。
…取り敢えず先に尋問からですね
「ココにタツマキとフブキという少女は居ますか？もし正直に話せば貴方を病院に連れて行く事を考えてあげましょう」
「…実、験棟、地下７階…実験、体…保管室…そこ…ガブッ…１０２…２０５…室……閉じ込め…と、聞いた…ガッ…ある。…これで…良、…のか？」
フム、実験棟…大きな建物は３つありますが…どれでしょう？
考えるより聞くほうが早そうです、聞いてみましょう。
「実験棟はどの建物なのですか？」
「……一番、右…左…居住……、ん中が研、究…棟。入るに…キーカード、いる」

右が実験棟、左が住居、真ん中が研究棟…なるほどね。
キーカード…あぁ、この男のポケットから覗いているコレですか。
…ふう、コレで準備は完了ですね。それではこの男も始末しましょうか…。
「…まて、待っ…くれ！俺に家族…居る、んだ！だからアンタに…情報を…売ったんだぞ、それなｎ……」
耳元で喋らないで下さい、元より貴方を助けるつもりなんて無かったんですから。
それに…
「考えてあげます…としか言ってません。誰も助けるだなんて言ってないんですよ」
そこの所をしっかりと考えなかった貴方の負けなんです。もっとも、もう聞こえてはいないでしょうが…あの神に宜しく言っといて下さい。
…さぁ、貴方達、私の友人を攫ったからには……覚悟、できてるんですよね？

十撃目　外堀が硬い?なら中から壊しちまえ（暴論）

…さ、実験棟へ向かう前に…研究棟と居住区を壊しましょうか。
私の友人を悲しませた報いを受けてもらわねば…いや、違います…私を怒らせた報いですかね。
本気の風はあの時…神と訓練したあの時以来ですよ。
さあ、頑張って耐えてください…私の全力全開の風(破壊)に！
「外壁は硬い…しかし内側からの暴風はいかがです?」
内側に最大出力の【夜の風(よのかぜ)】を発生させる。
外部からの強風には耐えられるように設計してある建物も、内部からの強風は想定外でしょう…?
ほら、そうこう言っているうちに建物はどんどん崩壊してしまいますよ?
全く…この程度ですか、期待していた私が馬鹿でした……うん?アレは…戦闘員でしょうね。先程殺したあの男と同じ服を着ていますし。
「アイツだ!アルファは例のアレを持ってこい!その間、相手は俺たちガンマとデルタでやるぞ!」

「こちらデルタ、了解。速やかに目標を排除する」
おや？マシンガンとアサルトライフル…？
そんな兵器、一般人にむけては行けないでしょう…
当たったら痛いじゃすまないんですよ？そこのところ分かってますか？
「標準よし、…Ｆｉｒｅ！」

アサルトライフルやマシンガンの掃射音が空気を重く震わせる
まるでリズムを取るような一定の音をたて、薬莢を大量に排出していく
…勝利を確信していた彼等を誰が責められようか
正面の男一人に銃を構えた兵士達が全弾外すなんてことをしない限り、目の前の男に勝ち目はない…そう彼等は考えていた
しかし、それは男が一般人であった場合に限られる

「…遅いですね！」
「な！た、隊長！こいつ…弾を躱している!?」
そう、風の力を操る私は空気中であればどんな動きも感知できるほどの索敵能力を誇ります。

更に、常人離れしている動体視力はまさに化物と言ってもいいレベルまで昇華させました。

これは最初はただの神から(転生特典の1つ)の贈り物であるウェスカーの能力でしたが、神との訓練や怪人との死闘を経て力を増した能力なのです。

ある意味では私の努力の結晶、とも言える能力となりました。

そしてこの残像が見える程の移動速度…

移動速度、動体視力、感知能力…これらを少し発動させれば弾丸回避位簡単です。

「……化物め、全体打ち込め!奴は躱すのに精一杯だ!」

「…了解!」「り、了解です!」

おや…それは少々頂けませんね、私が回避しかできないと思われるのは…

良し、暴れましょうか!

「【息吹(いぶき)・永代(ながよ)】」

この技の最大の利点、それは相手を引き寄せつつ攻撃ができ、更に軽い防御をも兼ね備えているという所ですよ。

体を中心に巨大な竜巻を発生させる、これにより相手を引き寄せ倒す事ができるのです。

銃弾も…ほら、軌道が逸れていますよ?

「うわあぁァァァあ!?」「デルタ3！……っくそォオ！」
「よせ、味方に当たる！」「吸い込まれる!?」
「糞、アルファはまだ来ないのカ…」「…化、物だ」
「ガンマ2?流れ弾に当たったのか?」
「いかがですか?コレが真の風の力です…それでは、お別れです！」
そしてこの技は竜巻を飛ばす事が出来るのですよ。
集まった敵を一網打尽にする…これ程効率的な攻撃があるでしょうか?
ほらご覧なさい、打ち上げられた敵が次々に降ってきてますよ。
…足音も聞こえてきましけどね、さっき離れたアルファでしょうかね。
ま、敵が増えようと全て粉砕し、先に進むだけですがね?

十一撃目　格ゲーの差し合いでも気を抜けばやられてしまう

躱す、躱す、また躱す…

さっきからずっとこの繰り返し、もう嫌になりますよ…。

このアルファが連れた来た怪物。名前は…確か、スコーピオン？

見た目ただの巨大サソリと侮るなかれ。

この硬い殻が私の風を防ぎ、ダメージを減らしています。

私の能力と相性が悪い敵、と言わざるをえません。

更に、先程尻尾攻撃を掠ってしまいまして…体が思うように動きません。

恐らく毒なんでしょう、サソリですし。

そのせいで体術の威力も半減、現状八方塞がりなんですよ。

オマケにブルーグリズリーとかいう某ハンティングゲームのアオ〇シラそっくりの奴や、タイラントとかいうホラゲーのラスボスの様な奴まで居るんですから…

たまったもんじゃない、本来なら逃げ出している状況。ですがね…？

今回ばかりは逃げ出せない。ですから…

「殴り合い、と行こうじゃありませんか」
運良く毒が回る前にアルファ部隊は潰せましたが…
コイツらはどうやって倒しましょうか…クッ！また掠った…。
今度はタイラントの爪ですね、まあこの程度は問題ありません。
問題はこの毒のせいで身体能力が著しく落ちていることです…っ！
危ない危ない…フンッ！このパワーではあまりダメージは期待できないでしょう。
風も物を吹き飛ばす位しか…おおっと。
…どうせ能力が使えないのなら、いっその事能力無しで戦いましょうか！
「…鉄パイプ、無いよりはマシでしょう」
まずはあの巨大サソリから仕留めましょう、アイツは動きが直線なうえに弱点は顔だとわかっています。
しかし顔を攻撃するためには正面に立つ必要がある…
それが難しいんですよ、動きは愚鈍でもパワーがありますから。
普段は顔をハサミで防御してますし。
考え事をしていたせいか、スティンガーの巨大なハサミが彼を捕まえる。
バキボキと嫌な音がして、彼の腕があらぬ方向へ向く。
苦悶の表情を浮かべ、それでも尚鉄パイプを無事な右手でスティンガーの頭に突き刺

す。
スティンガーは激痛のせいか一瞬力を緩め、その隙に彼は脱出した。
「はぁ…はぁ…ぐっ！…はぁ…」
今のは危なかった、本当に死ぬかと思いましたよ…。
でも今の攻撃で左手が死にました、コレは不味いですね。
これからあと二人の相手もしなくてはいけないのに。
スティンガーは暫く悶ていたが、やがて落ち着いたのかまた彼を執拗に追い回し始める。
彼ももう一度鉄パイプを握り、スティンガーの攻撃を紙一重で躱したあとにもう一度頭に深く突き刺す。
するとスティンガーはようやく動かなくなった。
「…ますは、一匹！」
勝利の雄叫びとして彼は叫んだ。
その姿に圧倒される残り二匹、しかし二匹もまたバカではない。
最大限の警戒を持って彼との戦いに挑みかかった

十二撃目　アオアシラは弱っちいけどラングロトラは面倒くさい（麻痺的な意味で）

次は…あのクマにしましょう。
あのクマの岩石投げは今の私の脅威となりますし、タイラントは動きが愚鈍なので邪魔になる事は少ないでしょう。
…っと、考えている間にも岩を投げてくるんですか！
引っかき攻撃にさえ注意すれば良いんですよ、アナタは比較的動きが単調なのでね。
そらそら！そんな攻撃じゃ当たりませんよ。
そろそろタイミングも合います、その時がアナタの最期です…
「グルゴラガアグィァァァァ!!!!」
「…そこです！」
ガコンッ！と鈍いが辺りに響く。
硬い腕の殻に鉄パイプがあたり、鉄パイプが曲がった音だ。
それを彼が視認した瞬間に〇オアシラの鋭い爪が彼の胸を切りつける。
寸前で回避しようとしたのが幸いしたのか、致命傷は回避できたものの浅くは無い傷

が胸にできる。
「グルルルルルギィィィイ！」
「…ガハッ」
まずい、非常にまずい。
まさかこのクマがここまで複雑な動きが出来るとは思いもしませんでしたよ。
少し傷をもらいすぎたかも…しれません。
しかしまぁ…嫌らしく噬ってくれますね…！
何か武器になる物は…紐？……っと。
流石に武器を探す時間はくれませんか、仕方ない。
この紐であなたを倒させて頂きますよ！
「グルァァァァァァァ!!」
足を引っ掛けてそこの鉄骨に突き刺す！
それが一番手っ取り早いでしょうが…クッ！
現実問題として仕掛けている間、こいつの相手を誰がするのかという問題が…
…問題というより前提から無理です。
タイラントの攻撃も掠り始めましたし、これは第二の人生終わったかもしれません…
風の力や身体能力も毒が回ってきてどんどん落ちてきていますし、頭もクラクラする

うえに視界もぼやけてきました。
…年貢の納時ですかね。
「グギョッ!?」
「全く…胸騒ぎがするので急いで来てみれば…少年、無事か?」
目の前には、個性的な…いや、アニメ等でよく見るヒーローの様な服を着た。
黒髪の平凡そうな男がア○アシラの攻撃を受け止めているではないか!
その光景にゲーニッツは驚きを隠せないでいた。
…誰でしょうか、私の知り合いではないですが。
タツマキさんのときみたいに友人申請ですかね?
…冗談です、一瞬毒による幻覚かと思いましたよ。
しかし何故?ここの場所を知ったのは私とてついさっきですよ?
取り敢えず…名前を聞きましょうか。
「あ、貴方は…?」
「俺か?俺は…趣味でヒーローをやっている者だ。…と言っても、普段は普通に働いているのだがね」
意外、話すと声が震えました。やはりダメージが多いのでしょう。
しかし…趣味?ヒーロー?…そんな嘘を信じろと言うのですか?

全く、見た目子供だからって俺の事舐め過ぎだぜ？
…おっと失礼、昔の言葉遣いが出てしまいました。
「……」
「そんな目で見ないでくれ…で、どうする？助けようか？」
助ける？私を？とんでもない。
むしろ助けて欲しいのは私じゃない。
「実験棟に居る、少女２人を…助けて…下さい。私はここで、こいつ等の足止め、をしておきますので」
「……わかった、そうしよう。」
さて、これで彼女等は安全でしょう。
問題は私側…どう倒しましょうか。

十三撃目　主人公補正って偉大

タイラントとの正面からの殴り合い。
鉄パイプでいなし、躱し、反撃する。
それでも厚い革と鋭い爪に押されて現状は劣勢…
まずい状況である事には変わりないのですよ。
オマケにあちらは身体スペックが私より上で私は既に瀕死。
あれ、これ詰んでませんか？
それこそスター〇ーストストリーム位使わないと勝てないような気がします…
「オオォォォォオ！」
力任せの大振りな攻撃を躱し、同時に頭に鉄パイプで打撃を叩き込む。
しかしすぐに反撃の一撃が飛んでくる、いなす。
いなした直後にカウンターを頭に決める。
反撃の一撃が飛ん（ｒｙ
「…流石にタフ過ぎませんかねぇ」
アナタは台所に出没する黒いヤツかってレベルの生命力ですよ。

豆腐ぐらい柔らかければ楽なのに…それはそれで問題ですか？
「あぁ…もう、このままでは千日手ですよ。」
またその　ダッシュ↓爪振り下ろし　ですか
正直、体が慣れてきましたよ？依然視覚はぼやけてますけど。
「グォガァァァァ！」
「おっと危な…っ!?」

無意識の油断、それは真剣勝負において最も多い敗因である。
相手がいくら愚鈍でも、こちらがとてつもない訓練を積んでもその油断や慢心一つで簡単に負ける。
現にゲーニッツは、毒に侵された体にも関わらず回避を選択した、結果は見ての通り。
毒によって足が笑ったゲーニッツは回避したとき、膝の衝撃を受け切れずバランスを崩し…タイラントのタックルをもろに受け壁に沈んだ。
朦朧とした意識の中、彼が見ていたのは卑下た笑みを浮かべるタイラントの姿であった。
「ギャファァァァ！」

…駄目だ、瞼が重い…心地良い眠気ですね

完全に入りましたねぇ…今のは…実に、効いた…

恐らく肋骨がやられているのでしょう…呼吸の度に変な音がします。

…あぁ、漫画やゲーム、ラノベの主人公はこんな窮地を乗り越えて強くなるのですね…

そりゃあ強くもなりますよ、こんな奴等を相手取るんですから。

ですが、私はしがない転生者。こんな力を貰おうが主人公には及びません。

今だって、恐らく目の前にいるであろうタイラントに踏みつけられていますし。

…当初の目的である友人の奪還は成功したし、これで良いかもしれません。

今思い出せば、タツマキやフブキと言った名前…確か『ワンパンマン』のキャラの名前だったはず。

ならば、私が変に彼女達に介入して原作のストーリーを壊す…それだけは避けなければ！

では、私(俺)と言う名の転生者(イレギュラー)は消えた方が良い。

存在するだけで物語が変わる可能性が大いにあるのだから――

――その瞬間、辺りに悲鳴が響き渡った

十四撃目　それは竜巻というにはあまりにも大きすぎた

私達がここに連れてこられて3年程たった。
連行される時はフブキに銃が向けられていたから仕方なくついて行った。
そこからずっとフブキを餌に研究対象として働かされた。
そりゃあ私だって嫌だったわよ?でも妹が人質にされてるから仕方ないって割り切ってる内に、段々とこの状況が当たり前になっていったのよ。
確かに扱いは良かったわよ、大体のことは言えば叶うしね。
それでも、我慢の限界だったわ
私も妹も道具の様にしか見てない連中に身体を舐め回すように見られて、よく分かんない機械を付けられて命令のままに能力を使う…
もう嫌!次職員が来たら「超能力が使えなくなった」とか言ってやる!
しかも噂では私を薬漬けにして快楽時の超能力の研究をやるとかどうとか…
……あら?何かあの研究棟(クソ野郎共の居場所)と居住区が騒がしいわね。
火事でもあったのかしら…ま、どうでもいいけどね。
「クソッ!損害を報告しろ!」

「…研究データは殆どが消失、研究棟、居住区の生存者は絶望的で建物ごと木っ端微塵。残ったのは実験棟のみです」
「原因はわかっているのか!?」
「…突如建物内に発生した竜巻が原因と推察されます」
「…あぁ忌々しい！こいつら実験素材はカプセルに詰めて脱出用の車に載せておけ！勿論能力阻害用の手錠を忘れるなよ！」
「「了解」」
竜巻？その手の能力者が反旗でも翻したのかな…それなら嬉しいんだけど。
でももう信じられる人間なんて居ないわ…親は私達を売り飛ばす、彼は音沙汰なし、一度外部実験の時に…近くの商店街のオバさんに助けを求めても冗談として相手にされない。
もう信じる事なんてできない、信じられるのは妹のフブキだけ！
私達姉妹に周りなんて物は必要ない…フブキは私を、私はフブキを見ていればそれでいいのよ。
何故こんなにも簡単な事に気づけなかったのかな…
「原因、判明しました」
「何？続けろ！」

「攻撃を仕掛けたのは対象番号（ターゲットナンバー）０８―Ｔｙｐｅ―Ｗ！アルバート・ゲーニッツ！先程までとベータの部隊が交戦していましたが殲滅されました！」

…嘘。

「……馬鹿な、ガンマとベータは下手をすると並の軍隊以上の強さを誇る傭兵集団だぞ!?」

「アルファが我々の作成した生物兵器、Ｔ―０２　Ｔｙｒａｎｔ（暴君）とＴ―０５　ＢＢ（ベースベアー）、Ｔ―０４　Ｓｃｏｒｐｉｏｎ（スコーピオン）を使用し排除にかかりました」

その報告を聞いて、私は一瞬頭の中が真っ白になった。

…嘘よ、彼が来るはずない。

そう思い込んでも、今聞いた名前は彼以外に私は知らない。

「…結果は？」

「アルファは全滅、スコーピオンは瀕死ですが、後の二体はほぼ損傷無しで稼働中。対象は大怪我を負っているうえにＳｃｏｒｐｉｏｎ（スコーピオン）の毒も食らっています。じき死ぬでしょう」

瀕死――――それは、つまり。死にかけている？

「そうか…よし、脱出は中止する！下手人は我々の実験対象として死体を利用させてもらう」

…なんで？出会って1年、確かに楽しい日々だったけど彼がわざわざ助けに来る理由にはならないでしょ!?

しかもこの組織のヤバさは少し調べればわかるはず、なのになんで!?

「き、緊急報告！対象の他に乱入者が現れ、対象と共闘！乱入者はこの実験棟に侵入した模様！」

…大怪我までして私達を助けるメリットは？

何が目的でここまでやってきたの!?訳わかんないわ！

「脱出準備解除！急g…」

…は？気付いたら研究員皆倒れてる…。

しかもなんか変な衣装着たオッサンがこっち見てるわ。

しかも肩には女の子担いで…フブキ!?なんでこいつフブキ背負ってんのよ！

十五撃目　Q．二次元と三次元の違いとは？　A．顔、行動

なんでこいつフブキを担いでるのよ！
「なんだか色々失礼な事を考えてそうだが今は無視する。俺の名はブラスト、趣味でヒーローをやっている者だ」
ヒーロー？こいつ頭大丈夫？
「…外の少年からの頼みで君達を助けに来た…が、一つだけ忠告だ」
忠告なんて要らないわよ、さっさと出すなら出しなさい！
彼が来ている事の真偽確認と怪我の具合を見ないとっ！
「まぁ落ち着け、忠告は簡単だ…いつでも俺や彼みたいな人間が助けてくれると思わない事だ。その様な甘えた心が人を殺す」
「…わかってるわよ」
そう、現に私は彼の事を裏切り者だと思っていた。
彼も父親達と同じ側の人間だと思っていた…。
いや違うわね…そう思う事で、彼を悪者にする事で自分の殻に閉じ籠ろうとしていた

んでしょう。
…酷い話ね。自分から話しかけておいて、いざという時には裏切り者扱い。
…彼に謝らなくちゃね。
「わかっているなら良いんだ。…急ごう、彼の身が危ない」
「…ええ」

そこに広がっていた光景は、まさに地獄絵図だった。
ズタズタに引き裂かれ、クズ肉となっているモノ。
辛うじて人だと分かる肉塊。
アスファルトのうえにまるでペンキの様に広がる血溜まり。
ボロボロの瓦礫の山となっている2つの建物。
暴れ回る怪物2匹に死んでいる大きい蠍が1匹。
そして私達が出てきた建物の外壁にもたれかかる様に彼は居た――
いつも着ていた服はボロボロになり、胸は鉤爪で切り裂かれた跡が3本。
脇腹は赤く染まり、片腕はありもしない方向へ曲がっている。
そして極めつけは呼吸する度に〝コヒュー〟と変な音が出ている点だ、恐らく肋骨が

肺に刺さっているのだろう。
そして今まさに、化物（タイラント）がその鋭利な爪を彼に振り下ろさんと爪を掲げていた。

…気付けば私は咄嗟に叫んでいた
タイラントが動きを止め…こちらを見て、目が合う。
途轍もなく怖い、死の恐怖や見た目醜悪な化物だ。怖いのは当たり前だろう。
でも…それでも、彼は今の今まで私達の為に戦ってくれた。
それだけでもう満足…あれ？
「…こ、ら。私を、無視す、るとは…い、い度胸、で…すね」
彼が立ち上がり、タイラントの露出していた心臓に思いっきり廃材の鉄骨を突き刺していた。
化物の体がゆっくりと地に沈み、遂には血溜まりへと倒れ伏した。
因みに、青いクマはブラストがワンパンで片付けちゃったわ。
なんだか拍子抜けしちゃったけど、まぁあのクマが弱かったんでしょ。
それは取り敢えず置いといて…彼には真っ先に伝えないといけない事がある。
言うのはとても恥ずかしいけど…言わないとね。
「ゲーニッツ…ありがとう、そしてごめんなさい」

彼は嬉しさと困惑の入り混じった表情を浮かべた後、満足そうに微笑むと気絶してしまった。

そこからのブラストとかいう奴の処理は早かった。

一瞬で青いクマを殺した後に残りの施設を破壊、私達を最寄りの病院に連れて行ってくれた。

何だったの?アイツは…

十六撃目　後日談　第1部　完

あの後、私が意識を手放して病院に連れて行かれた後の話を致しましょうか。
ますブラストさんですが…いつの間にか何処かに消えてしまいました…
私もタツマキさんも、勿論フブキさんも知らないらしいです。
次にタツマキさん。
私が助けに行った理由を尋ねられたので、「友人を助ける為」と答えたら全治５ヶ月だった私の怪我が全治６ヶ月になりました。
その事についても謝られたので別にいいんですけど…
今は小学校に入学する為に私が勉強を教えています、中々に飲み込みが早いですよ。
そしてフブキさんは…私の元にすっ飛んで来ました。
今は色々とお世話してくれてます。とてもカワイイ。
服を持ってきてくれたり、本を持ってきてくれたりと…有り難いでｓ…痛い。
「タツマキさん…だから超能力で手当り次第に物投げつけるの止めてくれません？」
「…うっさいわね、ほらさっさと教えてよ」

…まぁこんな感じでやっています。
研究機関は壊滅、そこら辺の遺体ごと大爆発したらしいです。
ニュースでやってただけなので…詳しい事はわかりませんが。
それにしても…やっと平穏に過ごせますよ…。
「…ル、アル、アル！」
「っ！はい、何でしょうか？」
急に話しかけられるとびっくりしますよ…
…妙に顔が赤いですね、風邪でもひいているのでしょうか？
「…私達の為にこんな怪我までして、助けてくれて…その、あ、ありがとう」
…明日は台風？それとも大雪？
もしかすると大地震や富士山の噴火が起こるかもしれませんね。
大事件です、彼女が素直にお礼を…しかも私に言うだなんて。
ですが、その照れ顔は反則じゃあありませんか？私には劇薬なんですが。
「…何黙ってるの？少しは反応しなさいよ」
「……いえいえ、とんでもない…私は貴方の友人ですから。私が貴女を助けるのは当たり前ですよ。それこそ一生守ります」
「っ!?何言ってんのよバカァ！」

痛い痛い痛い！腕にあたってますから！
そっちの腕、今粉砕骨折してますから！
消火器は投げるものじゃありませんよ!?痛っ…
……タツマキさん、ベッドは投げちゃ駄目ってわかってますよね？
「それ投げたらどうなるか…わかってるならその浮かせているベッドを元の位置に戻しましょうか」
「わかってるわよ?そんな事」
サラッと言わないで下さいよ…それと目が笑ってないです。
全く少しはフブキさんを見習っt…
…なんで更に浮いたベッドの数が増えてるんですか?
「アンタが私に…その、あんなこと言うから…」
「……は?」
「このウスノロ馬鹿野郎ォォォォ！」

「あら…ゲーニッツ君、足の骨も折れてるね。コレは全治８ヶ月に延長だね」
「…マジですか」
タツマキさん…もう少し考えてくれたって、いいんじゃないんですか？

番外編　外撃　前

病院から退院した次の日、タツマキさんから今後の相談とこの間の事についてのお礼という事で急遽、私の家（タツマキさんが吹き飛ばした跡地に立て直したプレハブ小屋）に集まる事になりました。

「パーティーなら…鍋にしましょうか」

「「賛成！」」

と言うわけで早速買い出し…なんですが。

何故かタツマキさんがついてくる、いつもなら「私達は机の整理とかやっとくわ」って言って家でフブキさんと遊んでいるのに…あれですかね？親離れじゃなくて妹離れ？そんなものまだまだ先でいいでしょうに。今だけですよ、兄弟仲がいいのは。

……って彼女らは姉妹ですからまた違うのかもしれませんが。

よくよく彼女を観察すると顔が赤い、挙動不審など…あれ？

「…どうしました？もし体調が優れないのでしたら先に家まで連れ帰りますけど」

「…なんでもないわよ、私野菜見てくるから」

タツマキはキッと彼を睨むと、スタスタと先に行ってしまった
彼はポリポリと頭を掻きながら彼女の背中を見送った後、自分も鍋の具材を探しに行きながら先程の彼女の行動の理由を考えていた

何故か不機嫌に…はて、私何か気に障るような事言いましたっけ…
それとも何でしょう、既に不機嫌だったところに私が声をかけたせいでしょうか…う～ん、わかりませんなぁ…おや、あれは長谷川さんでは？
お、あちらも気づいたようですね。
「いやぁ～アルバート君、こんな所で会うなんて奇遇だね。今日は1人かい？」
「いえ、タツマキさんと一緒ですよ…先程怒られて彼女とは離れてしまいましたけど」
「喧嘩でもしたのか？どれ、おじさんに話してみなさい！」
こういう所では頼もしい人なんですが…どうも普段は幸薄ですよね長谷川さん。
元々は政府役人だったらしいのですが事情で退職して、今じゃフリーター紛いの事をやって生活してますし。
因みに、自作携帯を作った理由が長谷川さんからの依頼です。
作ってなかったら…タツマキさんにまた迷惑かけたかもしれませんね、あの人なら勝手に私の分の携帯も買ってきてしまいそうです。

「どしたのボーッとして、もしかして話しにくい内容？なら無理には聞かないけど」

彼は、少しの間言うべきか考えていたがすぐに先程の出来事を包み隠さず全て話した。長谷川は暫くウンウンと相づちを打ちながら話を聞いていた。

そして、彼が話し終えると同情を向けるかの様な表情を浮かべていた。

「どうしたんですか？」

「…いや、うん、まぁ…さ。君達がどうのこうのするのは俺には関係ないけどね？その反応はあまりにもタマツキちゃんが可愛そうだよ…うん」

「…どういうことです？あと、彼女の名前はタツマキです」

「お礼言いたかったんじゃないの？彼女」

「なる程…」

その考えはありませんでしたね…いや、確かに体張って頑張りましたけど。

別に二度目の人生ですし、死んだら死んだときの事だと思って行動してましたし…。

ま、お礼ぐらいなら言われても良いかな？

ん、待てよ？既に病院でお礼言われましたし…あれぇ？

頭を撚るバカ二人であった。

番外編　外撃　後

…いくら考えても答えが出ないときってどうすれば良いんでしょうか。うん、あまり深く考えない方がいい気がしてきました、そうしよう。

さて、早く買い物を済まして皆で鍋を…おや？アレはタツマキさん？

どうしてあんな…お菓子コーナーに？

「…美味しそうだけど、う～ん」

…はっきり聞こえませんね。仕方ない、声をかけてみましょうか。

「…う～ん「タツマキさん」ッぇひゃあ!?」

な、なんかすごい声出てませんでした？……まぁいいでしょう。

見ていたのは…ミルクキャラメル？欲しいんでしょうか。

「…欲しいんですか？」

「ほっ！欲しくなんかないわよ！ただ…その、見てたのよ！」

見事なツンデレ？ってやつですか。欲しいなら遠慮せずちゃんと言えばいいものを…きっと欲しいんでしょうけど、ただ「買ってやる」じゃきっと「要らない」って言うでしょうし……そうだ。

「なら、私が食べたいのでそれ3つ買いましょうか」
「…まぁアンタがそう言うなら」
完璧、です！少ない脳ミソをフル稼働させた甲斐がありましたよ。フフフ…。

「「いただきます！」」
晩ごはんを美味しそうに食べる二人を見ていると、なんというか、その、温かい気分になりますね。決してロリコン的な意味ではなく。父性を刺激されるとはこういう事なんでしょうか、とても心地よく、そして私が守らねばと強く思います。
「どうしたの？食べないなら私が貰うわ！」
「ちょっ！お姉ちゃん、ゲニのご飯取っちゃだめだよ！」
「…」
…前言撤回です、少し灸を据えてやらねばなりませんね。他人の料理を取ってはいけないと。…まだ、まだ豆腐ならば許せました。しかし、皿に取ってある白滝を取るなんて許せません。わざわざ皿に取っていたのに…私だって怒りますよ？
「…これが貴女への罰です、喰らいなさい！」

私の最も良く使う技の一つである【豹牙】で接近し、彼女の嫌いな椎茸を口に含ませる。そしてそのまま食べかけていた彼女の豆腐を意趣返しで取って席に戻る。この間僅か０．８秒程！

「……ゲニィ！覚悟できてんでしょうねッ！」

チッ…やはりバレましたか。まぁ嫌いな食べ物口に打ち込まれたらそうなりますよね。でも今回ばかりは負けられません、食べ物の恨みは恐ろしい、それをわからせてあげましょう！

「外に出なさい！決闘よ!!」

この後滅茶苦茶怒られました。（主にフブキさんに）

流石に広範囲の超能力は駄目でしょ、タツマキさん。周り考えてください。

「煩いわよこのバカゲニ！」